

## 被災8日目から3日間の 女川町立病院支援



東京ベイ浦安市川医療センター  
管理者

神山 潤 (医29・昭56卒)

医学部を1981年に卒業後小児科に所属、大学院助教を経て、2004年より公益社団法人地域医療振興協会（Japan Association for. Development of Community Medicine ; JADECOM）に所属、現在は東京ベイ浦安市川医療センターの管理者を拝命している神山です。今回東日本大震災の被災地に8日目に入る経験をいたしました。同窓の皆様とこの体験を多少とも共有できればと考え投稿させていただきます。

JADECOMでは全国のへき地医療支援をしていますが、女川町立病院の経営を2011年4月から受託することになっていました。そこですでに協会職員が病院内に開設準備室を立ち上げておりました。齋藤院長も協会職員です。JADECOMでは齋藤先生支援目的での先遣隊が被災4日目の3月14日月曜に陸路現地入りし、そのまま支援を開始していました。先遣隊からの断片的な情報も含め、協会内施設の中でも女川の被害が特に甚大とJADECOMでは判断、全国の施設を結集して女川町立病院支援に全力投入することを16日に決定、18日にヘリ2台と大型バスで小生を含む医師5名、看護師、介護士、事務職等19名が現地入りすることとなりました。

新木場からヘリで90分の宮城県利府到着前には仙台空港周辺の惨状も上空から目にしました。利府での給油後女川に向け飛び立ちました。石巻では防波堤上に大型タンクが載っている等の町の被災状況も見え緊張が高まりました。しかし次の瞬間、仙台空港周辺や石巻の惨状を目の当りにした直後であったにもかかわらず絶句しました。きれいさっぱり家々がなぎ倒された集落が延々と続いているのでした。それが女川でした。利府出発後15分で女川町立病院駐車場に降り立ちました。

現地入りは11時半。午後から避難所を回りました。

災害医療というと外傷を思い浮かべますが、今回大けがの方がいらしたのは被災後1~2日だったそうです。津波が洗いざらい持って行ってしまったのかもしれません。避難所の方が必要としていたのは慢性の薬、糖尿病や高血圧の薬でした。幸い協会は大量の医薬品も持ち込むことができていました。「土日もなく病院はやっています。」とお伝えしてまいりました。徘徊老人で苦勞されている避難所もあります。徘徊老人はわたくしの手を取って「あったかいね。ありがとう。」とニコニコされていました。

女川町立病院は高さ16mの高台にありましたが、津波は1階の天井まであと30cmの高さにまで押し寄せたそうです。（<http://www.jadecom.or.jp/library/report/>）齋藤院長以下スタッフは文字通り命がけの患者救援でした。検査機器は壊滅状態で、診察は検査なしでした。私は小児科医ですが、診察に専門性は言ってられません。高齢者が中心の病棟回診も含め大人の方も当然拝見させていただきました。患者さんの中には1週間インスリンを使わず、きちんと朝食をとってもBS102の方や、1週間降圧剤なしでも良好な血圧の方も多数おいででした。ヒトというのは不思議な生物だな、と妙な感動を覚えました。3月20日に奇跡の生還を遂げたお二人（16歳少年と祖母）を受け入れた石巻日赤は18日にも19日にも救急車を2~3台快く引き受けてくださいました。18日夜には宮城県の要請で鳥取大学の災害医療チームが医師2名、看護師1名で約1,300名の方がおいでの最大の避難所に入ってくださいました。また19日には自衛隊の医療スタッフも女川入りしました。各チームや行政との連絡も定期的に行うことができるようになりました。また院内での検査も19日からは多少できるようになりました。



3月20日朝、病院の高台から望んだ女川湾

した。このように様々な点で支援の成果が見られるようになってきた一方で残念なこともあります。治安の件です。18日深夜にはモデルガンを携帯した若者二人が誤って車で海に突っ込んだ、とのことで受診しました。なぜ深夜の車を走らせていたのか気になります。

女川入りした18日夕には東北電力の電源車が配置され、病院の一部では電気がつきました。ただその晩はまだ電気が来ない部屋で懐中電灯で天井を照らして皆で話し込みました。19日には電気はほぼ全館で使用可能となり、夕方にはau携帯が一部で入るようになりました。20日にはauはほぼ確実に入るようになり、docomoも病院裏の一定の箇所では送受信が可能となりました。電源車わきでは東北電力の方が24時間体制でテント暮らしをされていました。au、docomoの方々もどこかで一所懸命精一杯仕事をされているのでしょうか。福島でも懸命の仕事が続いています。皆、素晴らしい仕事をコツコツとこなしているに違いありません。

18日はマンホールの上に便器を載せて作った応急のトイレでしたが、19日には仮設トイレが5台設置されました。また灯油ストーブも到着、「日に日に文化的になる」と皆さんおっしゃっていました。夜は床で寝袋で寝ました。私が居た18、19、20日は比較的暖かかったのですが、その前は電気もなく寒く、しかも雪が降ったそうです。なぜ雪、と恨んだ、地獄だった、との声もたくさん聴きました。ま

だ余震はしばしばあります。まずゴーという地響きが来てその後揺れが来ます。いつの間にか慣れてしまっている自分にふと気づいてびっくりしたりもしました。

町の惨状については言葉もありません。被災地内からの視点は報道でみる視点と「画像」としては同じですが、全く違います。その差異はいくら「画像」をお見せしても伝わらないと思います。これまで涙は「悲しみ」や「哀しみ」「切なさ」等々の感情が心を占め、ジンときてから出てきました。でも今回は違いました。街をかつでの景勝地から遠望したとき、いきなり涙が出てきました。辺縁系を介さずいきなり涙がでました。心がジンとする間はなく、直接にガンとやられ、涙が出た気がしました。初めての体験でした。

避難所訪問に同行して下さった看護師さんはまだローンを5年しか払っていないご自宅を流されたそうです。「今はみんなと一緒にいたい」と気丈に明るく振舞っていました。「まだ現実を正視する勇気がないんです。いつかはちゃんと見なきゃいけないことは分かっているんですけど」そうニコニコとおっしゃっていました。彼女は避難所を回る途中の道々で、ここは秘密のきれいな砂浜、ここはサンマ祭りの会場、ここからの眺めは最高だった、穏やかでいい街でしょう、と話をしてくださいました。女川で復興祭りのどんちゃん騒ぎをやろう、キレイになったら砂浜で泳ごう、と励ましあいました。いつか必ず実現させたいと思います。

女川の復興はこれからの大きな課題です。一方病院支援には長期的視野が不可欠です。3月20日には小生らと入れ替わりで医師3名が女川入りし、21日には管理栄養士等も現地入りしました。JADCOMでは組織を挙げて、自治体と協議しつつその後も支援を継続 ([https://www.koeki-info.go.jp/pictis\\_portal/other/pdf/katsudo-rei-koueki.pdf](https://www.koeki-info.go.jp/pictis_portal/other/pdf/katsudo-rei-koueki.pdf)) しています。同窓の先生方に多少とも小生の体験を知っていただければと思います。乱筆乱文失礼いたしました。